

## 一九三八年「宇宙戦争」事件の新しい資料

Howard Koch "The Panic Broadcast" Little, Brown  
and Company, Boston-toronto 1970

山 本 明

### I

「一九三八年一〇月三〇日、ハローウィンの夜のことであった。アメリカ全土にわたって幾百万の人びとが、全文明を破壊する火星人の侵略をえがいた放送によって、パニックにおちいった」。

心理学者H・キャントリルは、こうした書き出しで、CBS放送「宇宙戦争」によっておこされたパニックの研究報告書をはじめめている。たしかに放送によって起きたこのパニックは、アメリカ社会史の注目すべき一駒だし、放送のおそるべき機能を赤裸々にしめたのであった。

事件の概要を簡単に説明しよう。一九三八年というのは、アメリカのラジオの黄金期である。当時、CBSネットワークは毎日曜日の午後八時から一時間、オーソン・ウェルズ主宰のマーキエーリー劇場出演のドラマを放送していた。このドラマのシリーズ

は、人気番組であつたらしい。一〇月三〇日の番組は、H・G・ウェルズ原作の「宇宙戦争」。ドラマは、オーソン・ウェルズの「もし他の天体から地球を望遠鏡でみることができれば、それは小さな生物がうごめいているようにみえるだろう」といったモノローグではじまる。つづいて、放送はニューヨークのホテルからのダンス音楽中継という形式になる。つまり劇中劇だ。突然、音楽が中断し、臨時ニュースで「火星の表面に異常な爆発が起きた」ことを伝える。放送記者フィリップがプリンストン大学天文台のピアノソ教授（オーソン・ウェルズ）を訪ねて、火星についてのインタビューをする。そうしているうちに、プリンストン郊外のグローバー・ヒルにロケットが着陸する。フィリップとピアノソが現場に急行し、実況中継をはじめめる。すでに現場には大群衆が銀色に光るロケットをとりまいて、さわいでいる。やがて、ロケットから出てきた火星人の殺人光線でフィリップは殺され、

火星人は殺人光線と毒ガスをもって軍隊の抵抗を排除し、ニューヨークに進撃する。アメリカ政府は非常事態を宣言し、市民に避難を勧告する。ついに火星人はニューヨークに到着、彼らのガスでニューヨークは全滅する。死を目前にして放送をつづける放送局——。その頃、世界の主要都市に來襲していた火星人によって、地球は壊滅するのである。後半は、奇跡的に生き残ったピアソンのモノローグ。火星人は地球上の細菌によって全滅し、生き残ったピアソンは、地球の過去の栄光を回顧し、かえらぬ昔をなげく——。

この放送が、グローバース・ヒルの場面まで進行したとき、アメリカの何百万の市民は、この放送を真実とおもひこみ、パニック状態におちいった。家をして北へ逃げ出すもの、「最後の審判の日」が来たと祈るもの、友人やはなれて住む家族に電話をかけるもの、パニックはその日の真夜中まで続いたのである。

## II

キャントリルは、パニックのあと、ただちに調査に着手した。

この報告が、“Invasion from Mars, A Study in the Psychology of Panic”, First edition 1940, Second edition 1966. である。

これは、社会心理学的な古典的研究として有名であり、ここで詳述する必要もなからう。この報告の要約は、キャントリル自身によつてなされたもの (Chantoril, “Invasion from Mars” in “Process and Effect of Mass Communication”, edited by W.

Schramm 1965) 邦訳もある(「火星からの侵入」鶴見俊輔編『大衆の時代』所収)。また、この放送は、シレタック盤に録音されており、LPの複製盤もある (The War of the World: Audio Reissues, LAA 2355)。ただし、原盤の故障のためか、冒頭部分や途中の一部が収録されていない。

ところで、ここに紹介するハワード・コックの「パニック・ブロードキャスト」は、このパニック事件に新しい資料を提供している。コックは、「宇宙戦争」のシナリオ・ライターであった。のち映画界に転じ、「カサブランカ」「ヨーク軍曹」などのシナリオを書いている。本書は、従来、オーソン・ウェルズの陰にかくされていたコックが、三十数年前の事件をふりかえっている点で、興味ぶかい資料である。

本書によれば、「宇宙戦争」のシナリオを書いた当時のコックはかけ出しであった。H・G・ウェルズの原作をわたされたコックは、これを原作にこだわらずアメリカでおこった事件に自由に書きなおした。彼は火星人の着陸地をどこにしようかと、目をつむって、ひろげた地図の上に鉛筆をたてたら、そこがグローバース・ヒルだったというエピソードが書かれている。本書にはこうしたエピソードが豊富にもりこまれているのだが、とりあえず、内容を簡単に紹介しよう。

序文は、筆者のSF作家アーサー・クラークのインタビュー(一九六九年一〇月)がおさめられている。第一章「世界の終末の夜」は、コックがシナリオを執筆した前後の事情をのべている。

## 一九三八年「宇宙戦争」事件の新しい資料

ここには、一月三日の「デイリー・ニューズ」、「ニューヨーク・タイムズ」、「デイリー・ニューズ」の写真複製もおさめられている。デイリー・ニューズの論説は、次のようにのべている。

「こんな事件は二度と起してはならないのは、当然のことである。しかし、私たちは、あの日曜夜の狂気がラジオ番組にたいする政府の直接的検閲を必要とするという意見には組することはできない。反対に、ラジオにたいする政治的統制がいかに危険であるかをしめしている。」

第二章「ラジオ番組」は、コッホのシナリオ全文を収録している。このシナリオは、キャントリルの本にも収録されていて、さほど珍しいものではない。第三章「余波」は、まず、コ・エディター、ジョン・ハウスマンが放送中のスタジオの様子や混乱を語っている。放送の直後、CBSの建物は群衆と警官でうずまり、放送スタッフは大急ぎで逃げ出した過程が語られている。また、市民の反応やマスコミの反応があつめられ、さらに写真版で「バラエティ」（ラジオ・映画・演劇専門誌）十一月二日号のいくつかのエッセイや「ニューヨーク・サン」の記事やマンガが紹介されている。第四章「一人の火星人が彼のおかした罪悪の地を訪れる」は、コックが事件から三一年たった一九六九年にグローバー・ヒルを訪れた記録である。グローバー・ヒルはプリンストンから六マイルに位置する農村で、人口約二〇〇、郵便局もない村である。コック（とその夫人）は、あの事件が、現在、村人の中にどう生きているかを、インタビュで知ろうとする。事件の「現

場」であったグローバー・ヒルでは、放送のあとで大さわぎになった。銃をもって火星人にむかおうとした老人や、自動車でベンシルバニアにいる奥さんの実家へ逃げ出した夫婦など、村人はさまざまな体験をまるで昨日のこのように話した。貯水塔のあたりを、火星人のロケットと誤認して大さわぎした話も紹介されている。ここでは、事件の「現場」にいる人たちが、自己の感知し得る事実よりも、準環境からのニュースを信じてしまうという心理が浮ばりにされている。

第五章「火星、事実と伝説」は、他の章とはちがって、火星に関する伝説と科学的に明らかになった火星の知識をのべている。第六章「放送の特権」は、放送のもつアピールの強さをのべ、オソリテイにたいする盲信がひきおこす危険性を警告している。

### III

放送のおこしたこのパニックの資料は、キャントリルの事例研究が唯一のものであったために、これまで大衆行動の研究の例としてとらえられてきた。このことが、社会心理学の発達に大きな貢献をしたことは、いうまでもない。しかし、この事件は、じつにさまざまな問題を含んでいるのであって、それは大衆行動研究に限定されるものではないのである。たとえば、この事件の直後、言論の自由、政府の検閲の問題が提出されているし、マスコミの反応のイデオロギー的色彩も大きな問題である。

こうしたさまざまな問題は、今日的意義をもっている。たとえ

ば、今年の二月二〇日、アメリカ陸軍戦略通信司令部の技術的ミスで、全放送局に非常事態宣言が伝えられた事件は、放送とペニツクとの関係の再認識を要請している。このような状況の中で、

私たちが「宇宙戦争」事件について本書のような新しい資料を得ることができたのは、大いに好ましいことと言わねばならない。

(ABC順)

I 著書・編著書論文の部

間場寿一

「政党と政策決定過程」(池田義祐・佐々木交編『支賢配』)  
川島書店、一九七〇年五月

「住民運動の課題—政策変更をめざして」(京滋バイパス公  
害研究グループ編『公害・予測と対策』朝日新聞社、一  
九七一年三月)

城戸又一

「スペイン人民戦線の頃」(世界文化社編『スペインの旅』)  
世界文化社、一九七一年四月

北村日出夫

「市民意識の形成と放送」(日本放送協会編『テレビと生涯  
教育』日本放送出版協会、一九七一年三月)

松本通晴

「近畿北部村落における株とマキ」(『村落社会研究』第六集)  
塙書房、一九七〇年十月

三塚武男

労働経済研究会編『京都における小零細企業労働の実態』京  
都府民生労働部、一九七一年三月

小倉襄二

『社会保障と人権』汐文社、一九七〇年六月

角田 豊

「社会保障の思想」(戦後の社会保障)「社会保険・社会手当  
・社会福祉事業」(家族保障)(角田豊・小倉襄二編『現  
代の社会保障』(改訂版)法律文化社、一九七〇年六月)

「労働保険の課題と将来」(週刊社会保障)編集部編『日本  
の社会保障——一九七〇年の現状と課題』社会保険法規  
研究会、一九七〇年十一月

中央競馬労働組合編(村上正紀と共同執筆)『中央競馬労働  
組合運動史』労働旬報社、一九七〇年十一月

「全国一般(労働組合)」(岡崎三郎他編『日本産業組合—  
その生成と運動の展開』総合労働研究所、一九七一年二月)

住谷 馨

『衆議院総選挙(昭和四四年)にみられる京都市民の政治意  
識』京都市選挙管理委員会、一九七〇年八月

「福祉行政と住民福祉」(兵庫県社会福祉協議会編『今日の  
貧困』一九七〇年十二月)

竹中和郎

「社会開発——現代都市と地域福祉モデル」(蠟山政道編『首  
都圏の未来像』首都圏総合計画協会、一九七〇年十一月)

和田洋一

「新島襄」(小原国芳編『日本新教育百年史』第一巻 総説  
・人物篇)玉川大学出版部、一九七〇年四月

「同志社」(小原国芳編『日本新教育百年史』第二巻 総説・

学校篇) 玉川大学出版部、一九七〇年十二月

山本 明

「七〇年代のジャーナリズムをむかえるために」(片方善治

・林雄二郎編『情報化社会・4・伝える』毎日新聞社、

一九七〇年六月

香山健一・山本明・林進・池田敏雄共著『情報化社会の未来

権図』よみうりテレビ、一九七〇年八月

### II 翻訳書の部

嶋田啓一郎

クラーク・ムスターカス著(嶋田啓一郎・嶋田津矢子訳)

『個性と出合い』ミネルヴァ書房、一九七〇年四月

### III 雑誌論文の部

間場 寿一

「体系としての政治」(『人文学』第一一七号) 同志社大学人

文学会、一九七〇年七月

「バイパス公害と住民運動」(『経済評論』十二月号) 日本評

論社、一九七〇年十二月

「選挙における青年層の棄権(I)」(『評論・社会科学』創刊

号) 同志社大学人文学会、一九七一年二月

「住民運動の現状と課題」(『けんしゅう』第十四号) 京都市

行政研究所、一九七一年二月

「京滋バイパス反対運動の現状と課題」(『市民』創刊号) 勁

草書房、一九七一年三月

中条 毅

「労務管理の新しい課題」(『滋賀労働』四月号) 滋賀県労政

課、一九七〇年四月

「経済成長と労働者の福祉」(『日本労働協会雑誌』七月号)

日本労働協会、一九七〇年七月

「日本労務管理史」(戦前・戦中・戦後一・戦後二) (『官公

労働』九月号、十二月号) 郵政省、一九七〇年九月、十二

月

坂戸又一

「ある政治家の場合——エドワール・ダラディエ」(『現代と

思想』第三号) 青木書店、一九七一年三月

北村日出夫

「送り手受け手」この図式からの解釈が真のコミュニケーション

ションを生む」(『宣伝会議』一七卷二〇一号) 久保田宣伝

研究所、一九七〇年七月

「アメリカのマス・コミュニケーション研究の批判」(『人

文学』第一一七号) 同志社大学人文学会、一九七〇年七月

「子どものための情報整理」(『児童心理』二四卷一一号) 金

子書房、一九七〇年十一月

「広告による大衆操作の限界性」(『ブレイク』一一卷二号)

誠文堂新光社、一九七一年二月

「情報と人間」(『統計と教育』第一五五号) 文部省、一九七一年二月

「言語としての報道」(『評論・社会科学』創刊号) 同志社大学人文学会、一九七一年二月

「七〇年代社会変化の動向と展望」(『YTVレポート』七三号) 読売テレビ放送、一九七一年三月

松本通晴

「都市における「擬制村」の問題」(『評論・社会科学』創刊号) 同志社大学人文学会、一九七一年二月

松村 彰

「寡占市場における競争と支配 (I)」(『評論・社会科学』創刊号) 同志社大学人文学会、一九七一年二月

三塚武男

「今日における労働問題の底辺」(『部落問題研究』第二七輯) 部落問題研究所、一九七〇年七月

小倉襄二

「シビル・ミニマムと社会福祉政策への試論ⅠⅡ」(『人文学』第一一七号) 同志社大学人文学会、一九七〇年七月

「シビル・ミニマムの構成(1)~(2)」(『けんしゅう』第十一号・第十二号) 京都市行政研修所、一九七〇年七月・九月

「慈善問題」の構成」(『社会福祉研究』第六号) 鉄道弘済会、一九七〇年七月

「社会保障闘争と労働運動」(『社会保険・実務と法令』第八

巻第二号) 社会保険新報社、一九七一年二月

「非行を考えるフレームについて」(『月刊福祉』第五三巻第二号) 全社協、一九七一年二月

「地域福祉」の認識論」(『地域活動研究』第三巻第二号) 一九七一年二月

「戦時厚生事業」の論理」(『評論・社会科学』創刊号) 同志社大学人文学会、一九七一年二月

嶋田啓一郎

「社会保険と社会福祉サービス」(『週刊社会保障』五五八号) 社会保険法規研究会、一九七〇年四月

「医療制度の病理学」(『経済往来』四月号) 経済往来社、一九七〇年四月

「農協・生協間協同の今日的意義」(『農業協同組合』一八三号) 全国農協中央会、一九七〇年五月

角田 豊

「労働市場の構造変化と労働組合」(『日本労働協会雑誌』一三四号) 日本労働協会、一九七〇年五月

「生存権と福祉国家」(ジュリスト増刊『現代の法理論』) 有斐閣、一九七〇年六月

「大阪ガス爆発事故と労働災害」(『ジュリスト』四五二号) 有斐閣、一九七〇年六月

「ILOと安全衛生基準」(『人文学』第一一七号) 同志社大学人文学会、一九七〇年七月

「ILOと安全衛生・災害補償」(『日本労働法学会誌』三六号) 総合労働研究所、一九七〇年十月

「公害の補償」(労働法律旬報『公害と労働運動』労働旬報社、一九七〇年十月)

研究ノート「賃金政策の国際的動向」(『評論・社会科学』創刊号) 同志社大学人文学会、一九七一年二月

住谷 馨

「高齢者の労働と福祉」(『けんしゅう』第十三号) 京都市行政研究所、一九七〇年十一月

「老人医療の活動と展望」(『地域活動研究』第四卷第二号) 全国社会福祉協議会、一九七一年三月

竹中和郎

「都市的偏倚と地域福祉の課題」(『社会福祉学研究』第七号) 鉄道弘済会、一九七〇年十月

「都市生活と地域福祉の課題(I)」(『評論・社会科学』創刊号) 同志社大学人文学会、一九七一年二月

和田洋一

「放送学序説」(『人文学』第一一七号) 同志社大学人文学会、一九七〇年七月

「編成権思想の柔軟化を」(『YTVレポート』七一号) 読売テレビ、一九七〇年十一月

「モスクワの『国際文学』と京都の『世界文化』」(『世界文学』三七号) 世界文学会、一九七〇年十一月

「『世界文化』の思い出」(『現代と思想』第二号) 青木書店、一九七〇年十二月

山本 明

「地域コミュニケーションの可能性」(『新聞研究』九月号) 筑摩書房、一九七〇年九月

「情報化社会における新聞の変質」(『言語生活』NO. 133) 筑摩書房、一九七〇年十一月

#### IV 研究報告の部

間場 寿一

「青年の政治行動」第四三回日本社会学会大会シンポジウム(一九七〇年十月九日) 於東京女子大学

中条 毅

「能力主義と小集団」日本経営学会関西西部会(一九七〇年七月二日) 於京都大学

「能力主義と年功制の行方」日本経営学会第四四回大会(一九七〇年十月十五日) 於神戸大学

伊藤規矩治

“The Ethical and Social Responsibility of the Protestant Christian Religion in Modern Japan” (The 4th International Forum on “The Ethical and Social

Demands of World Religions for a Modern Society”) 一九七〇年七月二十日～二十五日、於東京



“The Position of Japan in Development” (The 5th Int'l Forum “One World only on Social Aspects of Economic Development Planning in Asia”) 一九七一年一月四日～九日、於、シンゴック

城戸又一

「ジャーナリズムの状況(戦前・戦中・戦後)」新聞労連全国研究集会、(一九七一年一月二四日)、於新聞労連

角田 豊

「ILOと安全衛生・災害補償」日本労働法学会第三九回大会(一九七〇年五月一八日) 於慶応義塾大学

“Wages Policy in Japan” (The 7th International Congress for Labour Law and Social Security) 一九七〇年九月一七日、於ポーランド・ワルシャワ文化科学宮殿

「学会二〇周年記念共通論題「戦後日本社会政策の基本的性格」のうち「賃金政策」」日本社会政策学会第四一回大会(一九七〇年十二月五日) 於上智大学